Social People Interview 作家 志茂田 景樹さん

絵本の読み聞かせを通して命の大切さを伝えたい

1998年に「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、命の大切さや生きることの素晴らしさを伝えている志茂田景樹さん。読み聞かせが持つ力や、活動の原動力について伺いました。

日本全国どこでも、読み聞かせに飛んでいく志茂田さん。ホームページで講演スケジュールをチェックできる。
「志茂田景樹のWEB絵本読み聞かせ劇場」
http://www.kageki.jp/

読み聞かせが持つ力に大きな衝撃

会場に僕が現れると、こども達がファッションを見てワーッと沸いてくれるんです。それがファンタジーの世界への導入。フルートやピアノの伴奏とともに、絵本の読み聞かせの始まり、始まりです。

そもそも僕のサイン会には親子連れの方が多く、こども達を喜ばせたいと思ったのが活動のきっかけ。その時に読んだのは「赤い靴」と「赤い蝋燭（ろうそく）」で、こどもも大人も一気に物語の世界に入り込んできました。そして、読み終えた時に自分自身の心が洗われたような感じがしたんです。帰り際、一人の女性から「実は嫌なことがあって落ち込んでいましたが、おかげで元気が出ました」と声をかけられ、読み聞かせが持つ力に衝撃を受けました。それでずっと続けていこうと心に決めたんです。

読み聞かせによって「いじめを受けた子の心が落ち着いてきた」とか「いじめが減った」という話も聞きます。絵本が持っているメッセージを理屈ではなく感動で伝える読み聞かせは、人の心を癒し、他人に対する優しい心も養うんですね。

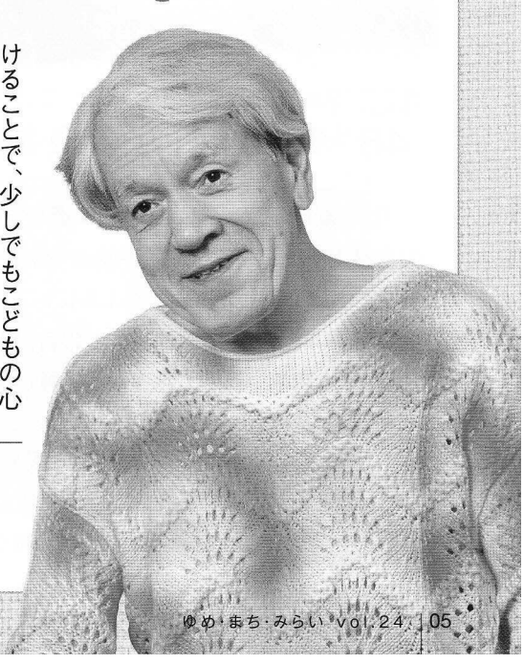
傷ついた心を少しでも癒したい

被災地でも読み聞かせを行っています。阪神淡路大震災から4年が過ぎた頃「PTSD※に苦しむ子達を癒して欲しい」と依頼を受けたのが最初でした。その後、新潟県中越地震や福岡県西方沖地震、さらに東日本大震災の被災地には年3～4回のペースで慰問しています。本のセレクトは普段と同じで、楽しい話ばかりではありません。動物の親子が生き別れる場面ではあちこちですすり泣きが聞こえます。辛い記憶と重ならないか、最初は心配でした。でも終わると、こども達は僕やメンバーにくっついて離れない。読み聞かせは大成功でした。もちろん、読み聞かせで全てが解決するわけではありませんが、「命は何よりも大事」「生きることは素晴らしい」というメッセージを伝え続けることで、少しでもこどもの心を癒したいと思って続けています。

好きなことを社会貢献につなげて

社会貢献といっても何から始めたらいいかわからないという方は、自分の好きなことをボランティア活動につなげてみてはいかがでしょう。今は難しくても、退職後に絵画でも音楽でも会社員時代にはできなかった趣味を活かしてみるのもいい。新しい自分を見出せるかもしれませんよ。僕自身、読み聞かせの相手はいつも違うから、感動の共有は常に新鮮。年齢とともに錆びつきがちな感受性のリフレッシュにもなっているかな、なんて思っています。

※PTSD（心的外傷後ストレス障がい）／強いショック体験が心の傷となり、時間が経ってからもその記憶が思い出されて恐怖を感じ続ける。不安・緊張・めまい・頭痛・不眠などの症状が続く場合もある。



Profile 1940年生まれ。中央大学法学部卒業。1976年に作家デビューし、1980年「黄色い牙」で直木賞受賞。小説・絵本・児童書作家でタレントとしても活躍。1998年に「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、公演数は1750回以上。近年はTwitterの人生相談が若者に人気で、フォロワーは25万人を超える。座右の銘は「今が出発点」。